

6. 所外協力者・アカデミアからの寄稿（寄稿者名について50音順に掲載）

6.1 環境研のモニタリングへの期待

恩田 裕一

筑波大学アイソトープ環境動態研究センター 教授



我々が環境研のモニタリングに期待するのは、もちろん六ヶ所村処理施設から放射される放射性物質の正確な把握です。モニタリングと言うと、ただルーチン作業かと思われる人が居るかもしれませんが、福島原発事故後のモニタリングを経験した身としては、様々な研究者の英知を結集して、極めて慎重に、かつ粘り強く行う必要があるものです。福島事故後には、初期の緊急時モニタリングの土壌や水のデータが、実際の汚染状況をうまく反映していない状況であったという反省があります。さらに、事故後の水環境のモニタリングにおいては、測定下限値が高いために汚染状況が全く分からず、測定下限値以下のデータが公表されていた等々、様々な問題がありました。この一方で、様々な分野の研究者が集まり、協働して世界に誇れる土壌における初期沈着マップを作り上げたという経験もして、やはり多くの異分野の研究者が協働する重要性を痛感した次第です。

緊急時の放射性物質のモニタリングについては、緊急時には短時間で、汚染状況の把握を行うためには、サンプリング、放射性物質について綿密な準備と測定の計画を立てなければなりません。これは言うほど簡単なことではなく、実際にあらかじめのエクササイズが必要であると考えています。そういった意味で環境研が、2022年より筑波大、弘前大、福島大、国立環境研、日本原子力開発機構がメンバーとなっている放射能環境動態・影響評価ネットワーク共同研究拠点（ERAN）に加入され、これまで以上の共同研究をオープンに推進されるようになったことは、大変に喜ばしいことです。

私自身は放射性物質の水、土砂に伴う移動の研究を行っていますが、さらに大気を通じた移行、生物を通じた移行等、様々な研究がなされています。さらにこれらの研究は、福島事故後にかなり広範囲に多くの分野の研究者によって行われたため、現在では世界をリードするまでになっています。そういった多くの研究者と環境研の研究者が共働し、議論する機会が増加したのは、環境研のミッションであるモニタリングを高度化するために大変良い機会かと思います。以前お伺いして見学させていただいた際に、実験機器やスタッフ等は非常に充実していることに感銘を受けました。これらのバックグラウンドを基に、さらに共同利用共同研究拠点としての活動を行うことによって、研究の進展はもとより、通常時のモニタリング、再処理施設運転後のモニタリング、さらに言えば、万一の緊急時のモニタリングの備えについてもさらなる議論を行うことが可能になるかと思います。福島事故の教訓からも、備えあれば憂いなしということでもあります。今後の環境研の研究の進展、モニタリングのさらなる高度化を心から祈念しています。